

名古屋学院大学まちづくりフォーラム

「大学の地域連携と商店街活性化」

- この6年間のまちづくり活動を振り返って -

場所：パーティセと 4階 マルチメディアルーム

日時：2006年12月9日(土) 午後2時 - 午後4時30分

内容：学生4団体による成果発表会・パネルディスカッション他

後援：愛知県 瀬戸市

第1部 学生まちづくり4団体による成果発表会

人コミュ倶楽部(サークル): 坪井智也くん 坂口悠太くん

マイルポスト(バーチャルカンパニー): 高橋千里さん 山本梨恵さん

地域活性化研究B(授業): 平岩英貴くん 今津裕文くん

地域活性化研究A(授業): 伊藤彰徳くん 伊藤嘉紀くん

司会者: 水野晶夫さん(名古屋学院大学助教授)

柳原綾乃さん(名古屋学院大学卒業生)



人コミュ倶楽部

...学生サークル 2001年4月に正式発足以来、商店街イベント参画、銀座茶屋・マイルポスト応援、まちづくりワークキャンプ、全国まちづくりカレッジ参加など、商店街活性化をテーマに多岐にわたる活動を展開。マイルポスト店舗内に事務所をもつ。

マイルポスト

...大学監督下のバーチャルカンパニー 2002 年9月オープン カフェとしての通常営業の他に、講演会&ワークショップ主催、さまざまな団体との連携プロジェクトをボランティアからビジネスまで店舗にて実践。経営・税務には大学インターンシッププログラムとして単位認定。

地域活性化研究 B

...経済学部授業科目（担当：水野晶夫先生）2003 年度からの授業「コミュニティビジネス実践講座」から発展。地域貢献・環境問題の研究・実践がテーマ。マイルポストのサポート組織として、雑貨コーナー、バーチャルモールの企画開発を担当。

地域活性化研究 A

...経済学部授業科目（担当：古池嘉和先生）2005 年度より開始。瀬戸市中心市街地活性化の研究・実践がテーマ。大学コンソーシアムせと「まちづくり施策協働プログラム」への参加、地域・商店街イベント参画など。



質問1 まちづくりを通じて学んだこと

人コミュ倶楽部 「コミュニケーション」

商店街の人たち等との関わり合いのなかで、異世代、社会人の人たちとコミュニケーションする機会を得ることができた。また、そのことによって多くのことを学んだ。

マイルポスト 「思いやり」

いろいろな立場の人たちと一緒に一つのことに取り組むなかで、物事をうまく運ぶには、相手に対して思いやりを持つことが大切だと思った。

地域活性化研究 B 「人間関係」

いろいろなプロジェクトを実践していくなか、先輩や同級生たちとの間に信頼関係が生まれた。やはり、人間関係と信頼づくりが大事だと思った。

地域活性化研究 A 「人と人とのつながり」

たまたま一つの授業に集まった学生たちが、同じ目標に向かって活動を始め、それを支援するために様々な組織、人たちが集った。そういう「人と人とのつながり」があったからこそ、すばらしい成果が得られたのだと思う。



質問2 まちづくりに必要なこと

人コミュ倶楽部 「仲間」

サークルを立ち上げて、一歩が踏み出せたのも、その一歩を継続させてこられたのも、仲間という存在があったからだ。そして活動のなかで、商店街や市役所の人たちとも仲良くなった。まちづくりにおいて活力となるのは、仲間だ。

マイルポスト 「Smile & 人とのつながり」

まちづくりでも何でも、活動していくときには、いろいろな人とのつながりが不可欠だ。そういうとき、笑顔で人に接していると、「この人のために何かしてあげよう」とか、「この人たちと一緒に何かやりたい」と相手は思ってくれるみたいだ。

地域活性化研究 B 「みんながひとつになること」

一人の人とか、一つの団体だけが頑張るのではなくて、皆がつながっていくことで、いろいろなことができ、まちは活性化していく。だから、皆が一丸になることが大事だと思う。

地域活性化研究 A 「コンテンツの整理」

まちづくり活動をしていく上では、様々な情報をしっかりと把握して、整理していくことが大事だ。そのことによって問題点等が見え、的確な解決策や改善策を講ずることができる。コンテンツの整理をすることで、一つのものを皆でつくっていけるようになる。

司会者まとめ

水野さん

それぞれ、人間関係について様々な学びをしているが、「人との関係づくりが大事」という点で共通している。そして、それは、知識として学んだのではなく、「体験から関係づくりを学んだ」ということで、それぞれ説得力のある言葉として伝わってきた。

柳原さん

授業で習っているだけだったら、「仲間」とか「笑顔」なんて言葉は出てこない。教室の中だけでなく、実際にまちに出てきているからこそ皆が一つになれるし、授業で硬くなっている頭ではない、と思った。



第3部 パネルディスカッション

パネラー

金田 学さん（愛知県産業労働部商業流通課）

山井利明さん（瀬戸市交流活力部産業課）

山内義則さん（銀座通り商店街振興組合理事長）

古橋敬一さん（学生・卒業生代表）

水野晶夫さん（名古屋学院大学助教授）

コーディネーター

古池嘉和さん（名古屋学院大学教授）



これまでのまちづくり活動の評価について

金田さん

インターンシップ事業として始まったマイルポストは、県の事業としても非常に成功した事例として高く評価できる。学生と商店街のコラボレートがうまくいった事業という点でも異例であり、それだけ難しい事業ということだが、経産省の「がんばる商店街77選」に選ばれたほどの成果を得ている。こうした活動を広げていくためのモデル事業になったと言える。

山井さん

「異世代の交流」というのは非常に難しいことだが、それを実現する場所と機会を担ったのがマイルポストだった。また、マイルポストは、商店街、学生、大学、役所など、様々な立場の人や組織が協働するための核となりながら様々に活動を広げたが、そのことが結果的に商店街の活性化につながった。「うまくいっている事例」として外部の人たちにも知れ渡っていたことから、その活動は評価できる。この6年間の活動が、まちを変えたことは間違いない。

山内さん

人が行き交うようになった銀座通り商店街と、実社会を経験したことによって当初より顔つきが随分と変わった学生たちを見れば、成果は一目瞭然だ。当初は、学生との関係が商店街の活性化につながるとは、夢にも思わなかった。われわれとは年齢の差がありすぎて「よくわからなかった」学生たちと活動を共にするなかで、彼らのエネルギーや発想を目の当たりにし、「負うた子に教えられ」という心境に到った。いま全国の商店街は苦境にあるが、これをきっかけに頑張りたいと思う。

古橋さん

銀座通り商店街に若者たちが集ってきて、商店街の人たちがそれを受け入れてくれて、大学が上手にサポートして、その結果、そこで楽しい物語が起きた。いうなれば、「それだけのこと」だが、そういう場で、人生の支えにもなるような、大切なことを学ぶことができた。人が人を育てるのはとても難しいことだと思うが、人は「場」をつくることはできる。その「場」が人を育ててくれるのではないか。このプロジェクトは、そういう場をつくってくれた。

水野さん

一番の成果は、学生たちにとって、「人との関係づくり」を学ぶ場ができたことだと思う。様々な教育プログラムを展開しながら全学体制でシステムをつくり維持してきた大学と、学生たちの活動がうまく組み合わさったところで成果は得られ、継続できた。

もう一つの成果は、「商店街を商店街の人だけで運営するのは限界があるので、外部の団体に利害関係者になってもらい、協働で商店街の活性化に取り組む」ということのモデルができたことだろう。

古池コーディネーター

今回のプロジェクトの成功は、大学という組織としてのバックアップ体制が整っていたことにより導かれたものだろう。つまり、システムがうまく機能し、地域や自治体とのパートナーシップがうまく取れたということで、ある意味で「システムの勝利」とも言える。

そして、従来よりある商店街の力に、学生という外からの若い力が加わり、それをいろいろな立場の人たちが支えた。そういう多くのプレーヤーたちの間にいい関係性が生まれたことが、「場づくり」を促し、活動を継続させることを可能にしたのだろう。

今後の展望について

金田さん

人と人が交流できる場があることは非常に重要だ。そのためにも、マイルポスの知名度を生かして、新たなパートナーを呼び込む仕組み（例：ワンデイ・シェフ、ワンデイ・オーナー）をつくっていく必要があると思う。そのとき、行政にはそういうことを応援できる補助制度がいろいろあるので、是非利用していただきたい。

マイルポスは、銀座通り商店街と名古屋学院大学の財産だったが、今後はもっと広く、皆の財産になるよう新たな発展をしてほしいと願っている。

山井さん

この6年間で培った、皆が集っているいろいろなことができるこの「場」を受け継ぎ、さらにステップアップさせながら「学びの場づくり」を担っていくことが、これからの商店街、地域住民、行政の使命だと思う。

そのためには、これまでの成果を生かして、「瀬戸モデル」ともいうべき運営システムをきちんと確立していくことが必要ではないだろうか。

山内さん

商店街としては、これまでのマイルポスの取り組みをうまく生かしたかたちで、各方面と相談しながら、今後の活動を進めていきたい。商売として採算が合うことを第一義に考えるのではなく、誰かのやりたいことや夢を実現できる場を提供するのもいいのではないかと、そういう夢を売る商店街があってもいいのではないかと、ということも思い描いている。いずれにせよ、まちづくりをするときに大切な、「若い人」、「外からの人」、「女性」の感性や発想を生かして、商店街の活性化に取り組んでいきたい。

古橋さん

マイルポスというすばらしい場に飛びついて、「こんなことやりたい」という人が新たに出てくるのが大事だと思う。「この人が頑張るなら」と支えてくれる人たちはすでにいるので、そことうまくつながっていけば、この場で新たな展開ができていくのではないかと。

ただ、常にアンテナを張り、誰よりも前を走って、失敗しながら学んでいくつもりがなければ、新しいシステムは生み出せないし、マイルポスという成果を受け継いでいくこ

とはできないと思う。

水野さん

商店街、行政、大学など、共に事業を運営する人たちが、それぞれいい関係をつくり、それをビジネスやボランティアというかたちのなかでつくってきたのが「マイルポストモデル」だと思う。そのなかに、新たにコミュニティビジネスや社会貢献を志す人、事業者が加われば、また新たな関係ができ、新しいマイルポストのモデルができていくのではないか。大学の教育プログラムとして維持してきたマイルポストだが、今後はまちづくりのための組織として発展していければ、新しい展開ができるのではないだろうか。

質疑応答

フロアから

A：「地域活性化研究 A」受講生の皆さん、誰かに任せるのではなくて、自ら進んでやる気持ちを持って、来年からも取り組んでください。1年間、ありがとうございました。

B：名古屋学院大学モデルをつくるとか、ノウハウや経験を引き継いでいく仕組みはつくられていくのか。

Bへのコメント（水野さん）

学生が主体的に関わるサークルと、教員が直接関わる授業をうまく組み合わせたら、そこで活躍する人たちが出てきた。その部分が、いわば「名古屋学院大学モデル」と言えるだろう。「その人たちを生かすシステム」ということだ。なお、名古屋学院大学としては、大学全体としてまちづくりを考える地域連携センターを設置する予定だ。

まとめ

古池コーディネーター

本日のディスカッションにおける共通のキーワードは、「場づくり」だ。「場」というのは、人と人との関係で豊かにもなれば、楽しい空間にもなれば、学びの場にもなり、変化していくものだ。マイルポストという場でも、これから新しい関わりのなかで、また豊かな「場」が生まれていくことを期待したい。われわれとしては、名古屋という未知の、新しい環境のなかで、また「場づくり」に取り組むつもりだ。瀬戸の場と名古屋の場が互いに切磋琢磨できる関係になれることを期待している。